

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 4 8	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
The 14-year course of alcoholism in a community sample: do men and women differ? 住民抽出標本におけるアルコール依存症の14年経過: 男と女は違うか?	
執筆者	
Edens EL, Glowinski AL, Grazier KL, Bucholz KK.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Drug Alcohol Depend. 2008 Jan 11;93(1-2):1-11.	
キーワード	
アルコール依存、危険飲酒、遺伝的相違、寛解、回復、疾病経過	
要 旨	
<p>目的:</p> <p>14年間観察しえたアルコール依存 (DSM-III による診断) の男女を、地域の大量飲酒者群および影響のない対象群と比較することによりアルコール依存の経過を検討する。</p> <p>方法:</p> <p>1997年の“Health Service Use and Cost 研究”を基にした症例対照研究。セント・ルイス疫学集水域(Epidemiologic Catchment Area: ECA)研究における1981-1983年の二つの調査に参加した442人の個人を14年間追跡調査した。</p> <p>症例はECAの両方の調査においてDSM-IIIのアルコール乱用(Alcohol abuse: AA)、あるいはアルコール依存(Alcohol dependence: AD)の基準を満たしていた(Two-times Alcohol Use Disorder Positives: ECA 2t-AUDPs)。対象群は2t-AUDPs群と頻度マッチングを行った二つのグループ、すなわち(1)大量飲酒者/一回のアルコール使用障害者群(ECA VHD/1t-AUDPs)と(2)アルコールの影響のない群とである。男女において、生涯および一年前におけるアルコール使用障害(alcohol use disorder: AUD)、飲酒パターン、回復に関して報告を受けた。</p> <p>結果:</p> <p>14年目の追跡時に、2t-AUDPs群の84.6%が再び、DSM-IIIの生涯基準を満たした。前年のAUD診断基準(DSM-IV)を満たしたのは、男性2t-AUDPの9.3%、女性2t-AUDPの20.7%しかいなかった。しかしながら、前年の飲酒パターン分析により、症例は対照群に比較してDSM-IVのAAまたはAD、問題のある飲酒、危険飲酒の頻度が高いことが明らかになった。すなわち症例(2t-AUDPs)で61.7%、対照群であるVHD/1t-AUDP群とアルコールの影響のない群とでそれぞれ41.2%、22.1%であった。</p> <p>結論:</p> <p>地域住民抽出標本では、前年のDSM-IVアルコール依存の率は女性に比べ男性2t-AUDPで低かった。男女とも、前年の率は生涯率に比べて格段に低かった。しかしながら低リスクのアルコール使用や禁酒などの行動を呈した者は、ECA 2t-AUDPsの半数に満たなかった。このことは、AUDの診断からの寛解は少なくないが、臨床的な重要性は持続することを示唆している。</p>	